

8章と9章に書かれている力ある奇跡のわざは、11:2-16:12の中で、つまずきとの対比の中で繰り返されていますね

OpenAI o1

マタイ8～9章で集中して描かれたイエスの奇跡のわざ（病のいやし、悪霊追放、汚れのきよめ、自然界への権威、死者のよみがえりなど）は、のちにマタイ11:2～16:12の流れの中でも再度取り上げられていく、あるいはそのテーマが発展していく形で繰り返し登場します。しかし11:2以降では、「つまずき」や「不信仰」がより大きく対比される構成になっている点が重要です。以下では、8～9章の奇跡がどのように11:2～16:12の展開の中で繰り返され、かつ“つまずき”と対置されるかを整理してみます。

1. まずはマタイ11:2-6：バプテスマのヨハネの疑問と「つまずかない幸い」

- 8～9章の奇跡 → 11:5でイエスが総括

バプテスマのヨハネからの問いかけ（「来るべき方はあなたですか」11:3）に対し、イエスは「目の見えない者たちが見、足の不自由な者たちが歩き、ツアラアトがきよめられ、耳の聞こえない者たちが聞き、死人たちが生き返り、貧しい者たちに福音が伝えられている」と、8～9章で網羅的に描かれた諸奇跡（イザヤ書のメシア預言とも対応）を列挙します。

- 「だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです」（11:6）

ここに、イエスの“力あるわざ”と“つまずき”とが正面から対比されます。ヨハネでさえも状況次第でイエスに対して疑問を抱く（ある意味「つまずきそうになる」）のです。イエスはご自身の奇跡を根拠として「わたしこそメシア」と示す一方、**それを見ても“つまずく者”がいる**ことが暗示されています。

2. 11:7-12:50：不信仰と反発が顕在化する

(1) 不信仰な町々への宣告 (11:20-24)

- 8～9章の奇跡の大半はガリラヤ地方（カペナウム周辺）で行われました。しかし、それを目撃しても悔い改めない町々がある。
- 「もしソドムであのような奇跡が行われていたら...」（11:23-24）と、**奇跡を見たのに信じず、つまずくイスラエル人**という図式が浮き彫りに。

(2) 安息日論争・宗教指導者との対立 (12:1-14, 22-37)

- イエスがさらに病人をいやす（12:9-13：安息日に片手のなえた人を癒す）と、パリサイ人は「殺そう」と相談し始める(12:14)。
- 12:22-24では悪霊を追い出したのに対して、「この人はベルゼブルの力で悪霊を追い出している」と言われる。
 - 8～9章のような悪霊追放の奇跡が改めて行われているのに、人々の一部（宗教指導者）は“感謝”ではなく“誹謗”で応じる。これは明確に「つまずき」の姿です。

(3) 「印を求める世代」への警告 (12:38-45)

- 12:38でパリサイ人や律法学者たちが「わたしたちがあなたから印を見せてもらいたい」と要求。
- しかし、実際にはすでに **8~9章のような数々の印（奇跡）が示されている**にもかかわらず、なお「もっと印を見せる」と迫る不信仰。これも「つまずき」の具体例と言えます。

3. 13:1-52：つまずきのたとえ話へ

- マタイ13章には「御国の奥義」のたとえ話が並びますが、その中で「つまずき」や「正しい応答・誤った応答」が象徴的に語られます（種まきのたとえで、“道端”“石地”“いばら地”が神の言葉を受けてもつまずいてしまう図など、13:3-23）。
- 8~9章の奇跡を目撃しても心を閉じる人々が居た、という現実を、たとえ話として明らかにしているわけです。

4. 14:1-16:12：奇跡の再展開とさらなる反発

(1) 14:13-21, 15:32-39：パンの奇跡（5000人&4000人の給食）

- 8~9章には明確な「大量給食」の奇跡は出てきませんが、同じ「病を癒す」「人々を養う」という恵みが拡大していく形で描かれます。
- 特に14:14「イエスは彼らを深くあわれまれた」は、8-9章のいやしの連続を思い起こさせる。

(2) 14:22-36：湖上を歩く・病人のいやし

- 8:23-27での「嵐の鎮静」に続くように、再び湖と奇跡（湖上歩行）が登場し、弟子たちの信仰（あるいは恐れ）があらわに。
- 「本当にあなたは神の子です」（14:33）という告白は8章後半(8:29 悪霊たちが「神の子よ」と呼ぶ)とも響き合う。

(3) 15:21-28：カナン人の娘のいやし（異邦人への奇跡）

- 8章5-13で百人隊長の僕を癒されたように、**ここでも異邦人の信仰（カナン人の女）が焦点となる。**
- 「あなたの信仰は立派です」（15:28）は百人隊長との並行を感じさせ、しかし当時のユダヤ人には“つまずき”となるような出来事（異邦人への恵み）。

(4) 16:1-12：パリサイ人たちの「しるしの要求」、イエスの嘆き

- 「天からのしるしを見せよ」という要求が繰り返される(16:1)。
 - すでに無数のしるし（8~9章以来の奇跡連発）があるのに、**彼らはそれを認めず、受け入れず、逆にイエスへの敵対を深めている。**
 - 16:6-12では弟子たちに「パリサイ人とサドカイ人のパン種に注意せよ」と警告し、「つまずき」=不信仰を象徴するような存在とされます。
-

5. まとめ：奇跡が繰り返される一方で「つまずき」が増幅してゆく

- **8～9章**：イエスの力あるわざを集中的に列挙し、その権威・憐れみ・メシア性を示す。そこでは主に「人々の驚き・感謝」「弟子になる覚悟」「悪霊の“神の子よ”という呼びかけ」などが描かれ、パリサイ人との対立はまだ表面化しない。
- **11:2～16:12**：
 1. バプテスマのヨハネですらイエスに疑問を呈し（11:2-6）、イエスが「つまずかない者は幸い」と述べる。
 2. ガリラヤの町々が奇跡を目撃しても悔い改めず（11:20-24）、パリサイ派がいやしや悪霊追放を“冒涇”として告発（12:22-24）する。
 3. 大勢を養い、異邦人を癒す再度の奇跡さえ起こるのに、指導者たちは「もっと印を見せろ」と要求（16:1-4）。
 4. 結局、**イエスのわざを見ても信じない“つまずき”が拡大し**、イエスは弟子たちに「彼らのパン種に注意しなさい」と警戒を呼びかける（16:6-12）。

こうして、**8～9章で明確に示された「救いのわざ」（11:5参照）が、その後のストーリーでも繰り返し行われるにもかかわらず、人々がそれをどう受け取るかによって「つまずく者」「信じる者」の分岐がより鮮明になっていくのが、11:2～16:12の大きな流れです。**

特に、マタイ11:6「わたしにつまずかない者は幸いです」との対比が、後半の奇跡と論争のエピソード全体を貫くテーマとなっている、と理解できます。つまり、**8～9章での奇跡＝メシア的権威の提示**が一旦示された後、11:2～16:12では「その権威をどのように受け止めるのか？ 信じるか、つまずくか」という問題が読者の前に突き付けられていく**わけです。

結論

- **8～9章に凝縮された奇跡のわざは、マタイ11:2以降でも繰り返し行われ、さらに拡大形（大量給食など）で現れていきます。**
- 同時に、**それらの力あるわざを前にしても“つまずき”や“不信仰”が高まる**という対立構図が、11:2～16:12で一段と鮮明に。
- こうしてマタイは、「**イエスのしるしを見ても、信じる者とつまずく者に分かれる**」という神学的テーマを物語全体にわたって繰り返し強調しているのです。

この構造を見ると、イエスのわざが単なる「能力の披露」ではなく、**人間の応答（悔い改め・信仰 or つまずき・拒絶）を引き起こす神の国のしるし**として描かれていることがいっそう浮かび上がるでしょう。

5:-7:と10:に書かれている教え（律法）に聞き従わないことも11:2-16:12の中に繰り返されていますよね？

OpenAI o1

マタイ福音書の大きな流れを振り返ると、**5-7章**（「山上の説教」）と**10章**（弟子の派遣に関する教え）は、ともに「イエスが語った新しい律法（あるいは戒め・命令）」と位置づけられます。そして、これらのイエスの教えに対して“従うか、従わないか”という軸が、**11:2-16:12**でさらに際立って描かれていきます。すでに8-9章の奇跡と、それに対する“つまずき”や“不信仰”のテーマが繰り返されることを見ましたが、同様に**イエスの教え（律法）**が無視されたり拒絶されたりする姿も、この区間（特に11-12章前後）で繰り返し描写されるのです。

以下では、「山上の説教」(5-7章)と「弟子派遣の教え」(10章)の要素が、どのように11:2-16:12の中で再登場し、それを人々が聞き従わない（あるいは反発する）形で描かれているかを整理します。

1. 「山上の説教」(5-7章)の要点と、11-12章での再登場

(1) 5-7章：イエスの新しい律法（真の義・内面の徹底）

- **内面の義**(5:21-48)、「人を裁くこと」(7:1-5)、「実を見れば木がわかる」(7:15-20)などが主要テーマ。
- また「偽善・形式主義を退けよ」「人を赦せ」など、**律法の本質・心**に関わる教えが中心。

(2) 11-12章における対立と不服従

- **11:20-24**：悔い改めない町々への嘆き
 - イエスが多くの奇跡を行ったのに、彼らは悔い改めに至らない。これは山上の説教で強調された「内面の変化」や「実を結ぶこと」(7:15-23)に応答できていない姿です。
- **12:1-14**：安息日論争
 - パリサイ人たちは「形式的な安息日遵守」に固執してイエスを批判。
 - しかしイエスは「わたしがあわれみを好む（ホセア6:6の引用）」(12:7)と語り、**山上の説教で語った律法の本質（内面の義、愛）**が理解されていないことを指摘。
- **12:22-37**：悪霊追放に対する冒瀆的批判
 - ここでもパリサイ派がイエスを「ベルゼブルの力で悪霊を追い出している」と非難。
 - イエスは「木がよければその実もよい」「心からあふれることを口が話す」(12:33-35)と、**山上の説教（木と実、内面の義）**を思い起こさせる言葉で反論します。

これらの一連の対立は、「山上の説教」で示された**律法の内面的完成とあわれみ**を受け入れようとしなない宗教指導者・人々の姿を際立たせ、**教えに聞き従わない“つまずき”**を繰り返し描いています。

2. 「弟子派遣の教え」(10章)と、11-12章における受け止め

(1) 10章：弟子たちを遣わす際の教え

- 「行く先で平和のあいさつをし、受け入れられなければ塵を払い落とせ」(10:12-14)
- 「迫害が来るが恐れるな」(10:16-31)
- 「わたしより父や母を愛する者はふさわしくない。自分の十字架を負い、わたしに従え」(10:37-39)

- **イエスを受け入れるか、拒むか** がはっきり分かれることを予告する内容。これがのちの11-12章の中で実際に起こる「イエスと弟子たちへの対立」に反映されます。

(2) 11-12章で実際に起こる受け入れ・拒絶

- **バプテスマのヨハネの疑問(11:2-6)**
 - ある意味「最前線でイエスを指し示した預言者」が動揺を覚える。イエスは「つまずかない者は幸い」と言い、10章で予告したように「受け入れる・受け入れない」が厳しく問われる状況へ。
- **不信仰な町(11:20-24)、敵対する宗教指導者(12章)**
 - 10章でイエスが「受け入れられなければ、その町を去れ」と教えたように、実際ガリラヤ地方でも拒絶の態度をとる町や人々が続出。
 - 安息日論争(12:1-14)や悪霊追放論争(12:22-37)は、まさに「イエスが迫害・誹謗される」図式そのもので、**10章の警告が現実化**していく。

こうして、**10章でイエスが「迫害・拒絶がある」と弟子たちに教えたことが、11-12章で実際に顕在化する**のです。そして、その中で**人々がイエスの教えに聞き従わず、逆につまずいてしまうパターン**がいくつも登場します。

3. まとめ：5-7章・10章の教えに対する“不服従”“つまずき”が11:2-16:12であらわに

- **5-7章**：イエスは「旧約律法を内面から完成する」新しい義、愛、赦し、あわれみを教えた。
- **10章**：弟子たちを派遣しつつ、「迫害もあるが、それでも宣教を進めよ。受け入れられない場合はその町を去れ」という指示を与えた。

それに対し、**11:2-12:50**（続いて13-16章でも）は、具体的な拒絶・批判・つまずき・迫害が連続して描かれます。とくに、

1. **山上の説教で示した教え（内面的義／あわれみ）を受け入れず**、形式的な律法主義や安息日の表面的遵守にこだわる宗教指導者たち。
2. **弟子たちを派遣したときに予告された「受け入れか、拒絶か」の構図が現実化し**、人々が“悔い改めない”町やイエスを“冒涇”するリーダーが目立つ。

このように、**イエスの力あるわざ（奇跡）が行われても、またイエスの教えが説かれていても、人々がつまずく・不服従を示すケース**が11:2-16:12で繰り返しくローズアップされるのです。

結論

- **マタイ8-9章**ではイエスの力ある奇跡（メシアとしての権威）が鮮やかに描かれた一方、
- **5-7章・10章**で示された「新しい律法（神の国の教え）」もまた、11:2-16:12の物語の中で実践的に問われる段階へと進みます。
- その結果、**人々がイエスに“つまずく”現象**（バプテスマのヨハネの動揺、悔い改めない町々、宗教指導者の反発、さらなる“印”の要求など）が露わになり、**教えにも聞き従わない姿**が明確に表現されるのです。

要するに、**11:2-16:12**は「奇跡のわざ」と「教え（律法）」の両面に関して、イエスがすでに示したものを受け入れるか拒むかの岐がいろいろはっきりする場面と言えます。その中で、残念ながら多くの人から従わずにつまずく姿が強調されるわけです。これは後半以降(特にマタイ13章のたとえ話群や、最終的にイエスが拒絶されて十字架へ向かう流れ)へと繋がっていく大きなテーマでもあります。

マタイ8-9章について、今までの議論に基づいて文章にまとめたい。

- 4:18-11:1は、主イエスの権威ある教えと権威あるわざ（知恵と力あるわざ 13:54）
 - 御国の福音としての教えと御国が来たことの証の奇跡
 - 律法（さばきの原則の教え）と預言者（律法の適用、さばき警告とさばき実行）
 - 5:1-7:29と10:5-11:1は律法
- 8:1-9:34は、力あるわざの段落
 - 11:5(4:23-24, 9:35, 10:1, 10:8)に書かれていることが行われた
 - 預言者イザヤの預言の成就 イザヤ35章、61章
 - 律法の段落がモーセやヨシュアを連想したように、この段落は預言者エリヤと預言者エリシャを連想する
- 段落構成の分析 ABCD
- 奇跡の特徴いろいろ
 - 手で癒す（汚れや死に触れると汚れるのではなくきよめられる）
 - レビ記ツアラアト、長血
 - 立ち上がる
 - ことばによる癒し
 - 見ずに信じる者は幸いである
 - つまずきの兆候が見られる
 - 11:2-16:12に詳しく、悔い改めない者、信仰の薄い者たちへの警告が書かれている（預言者のことばを聞きなさい!）

OpenAI o1

以下は、これまでの議論を踏まえたマタイ8-9章のまとめです。ポイントとしては、「権威ある教え（律法）」と「権威あるわざ（奇跡）」の二つの軸でまとめながら、旧約聖書におけるモーセやヨシュア、エリヤやエリシャの働きを連想させる構成、さらにイザヤ書の成就としてのメシア的救いのわざ、という流れを意識しています。

1. マタイ4:18-11:1の全体構造——教えとわざ

マタイ福音書では、4:18-11:1までが大きく「主イエスの権威ある教え」と「権威あるわざ」に区分される流れを持っています。これはマタイ13:54の言葉、「この人のこの知恵と力あるわざは、いったいどこから来たのか」に象徴されます。

1. 権威ある教え（律法）

- 5:1-7:29（山上の説教）：律法の真髄とさばきの原則をイエス独自の権威で示した部分。
- 10:5-11:1（弟子派遣の教え）：山上の説教に続いて、弟子たちがその教えを宣べ伝えるよう派遣される。ここにも律法（神の言葉）を体現し伝える使命が記される。

2. 権威あるわざ（奇跡）

- 8:1-9:34：イエスが行われた数々の「力あるわざ」が集中して記録されている。

- ここで展開される奇跡は、単なる「力の誇示」ではなく、**御国が来たことの証**（4:23-24, 9:35, 10:1, 10:8参照）であり、預言者イザヤが告げたメシア到来のしるし（イザヤ35章、61章）として位置づけられます。

2. 8:1-9:34——力あるわざの段落

(1) イザヤ書の預言の成就

マタイ8-9章に収められた一連の奇跡は、11:5でイエスご自身がまとめられた

「目の見えない者たちが見、足の不自由な者たちが歩き、ツアラアトに冒された者たちがきよめられ、耳の聞こえない者たちが聞き、死人たちが生き返り、貧しい者たちに福音が伝えられています」に対応するように描かれます。これはイザヤ35:5-6や61:1など、**メシア時代のしるし**として予告されていた事柄です。

(2) モーセやヨシュアに続く「律法」の段落との対比

5-7章と10:5-11:1が、それぞれ「律法を語るモーセ」や「民を導くヨシュア」を連想させたように、8:1-9:34では**預言者エリヤとエリシャ**が思い起こされる場面が多々あります。ツアラアトのきよめ（2列王5章のナアマン）、死人の復活（1列王17章、2列王4章）、嵐の鎮静（エリヤが祈りによって雨を制御する）などです。マタイはこうした旧約の偉大な指導者・預言者像を下敷きに、「イエスはそれらをはるかに超える権威をもつメシア」であると描いているのです。

3. 段落構成（A, B, A', C, D）と奇跡の特徴

よく指摘される通り、マタイ8-9章にはA, B, A', C, Dという並行構造が見られます。それぞれ「汚れのきよめ」「中風の癒しと罪の赦しの権威」「死や病からの回復」「弟子としてついて行く・つまずく」「悪霊追放と盲人の回復」といったテーマが繰り返されています。

- **手で触れて癒す**

- 旧約のレビ記規定では、汚れや死体に触れると接触した人も汚れるはず。しかしイエスは逆に**触れることで汚れをきよめ、死から命をもたらす**（ツアラアトや長血の女、死人の少女など）。
- これはレビ記における汚れの規定を超越するイエスの権威を示す重要ポイントです。

- **「立ち上がる」モチーフ**

- 中風の人が「起きなさい」と言われて立ち上がる(9:6-7)、死人の娘が立ち上がる(9:25)、熱病のしゅうとめが起き上がる(8:15)など、“立ち上がる”行為が神の救い・命の回復を象徴しています。

- **ことばによる癒しと「見る・見ずに信じる」**

- 百人隊長の僕の癒し(8:5-13)では「おことばをください」とだけ願い、それで十分と信じた異邦人の姿が描かれ、「信仰の偉大さ」が際立ちます。
- 一方、奇跡を見ても信じず「つまずく」者たちが後の章（11:2-16:12）で続出することが伏線的に示唆されます。「**見ずに信じる者は幸い**」という福音書全体のメッセージにも通じる展開です。

- **つまずきの兆候**

- 8-9章ではイエスを真剣に求める人々が中心ですが、一部では「この人は神を冒瀆しているのか」(9:3)といった疑いの声も見え隠れします。
- 11:2以降、特に宗教指導者や悔い改めない町々への警告を通して、**奇跡のわざ**を見てもなお信じない「**つまずき**」がより大きなテーマとして顕在化します。

4. 8-9章の後に待つ「つまずき」と「悔い改め」の対比

マタイ11:5に書かれているように、「目の見えない者が見、足の不自由な者が歩き、ツアラアトがきよめられ、死人が生き返る」という恵みあふれるわざが実際になされたにもかかわらず、11:2-16:12ではバプテスマのヨハネでさえも疑問を抱き(11:3)、ガリラヤの町々は悔い改めず(11:20-24)、パリサイ派はイエスを攻撃し始めます(12章)。ここに「**権威ある教え**」と「**力あるわざ**」を拒む者たちの姿がはっきりと描き出されるのです。

こうした「つまずき」を通じ、読者は一層「**イエスの言葉(律法)とわざ(奇跡)の本質**」を見極め、**従うか拒むか**を問われる構成になっています。すなわち、

- **イエスが真の律法の完成者(山上の説教)**
- **イエスが真の預言者・メシア(力あるわざの行使)**

という宣言を受け取るか、「それに対してつまずき、拒絶するか」という選択が、この後の章で明確になっていくわけです。

5. 結び

- **4:18-11:1** はイエスの「**権威ある教え**」と「**権威あるわざ**」が両輪をなしている大きな区分。
- **5-7章、10:5-11:1** の「**律法**」(モーセやヨシュアを想起させる)に続き、**8-9章**では「**わざ**」(預言者エリヤやエリシャを想起させる)に焦点が当てられます。
- これら奇跡はイザヤの預言の成就として、「**御国が来た証拠**」であると示され、汚れや死を覆すイエスの力が描かれています。
- しかし、その力あるわざを見ても悔い改めない人々や指導者たちが存在し、11:2-16:12で「**つまずき**」の問題が浮き彫りになっていきます。

こうしてマタイは、**イエスの教え(律法)を受け入れるか、イエスのわざ(奇跡)を見て信じるか**というメッセージを、読者へ問いかけているのです。信じて「立ち上がる」か、それとも「つまずき」続けるか——マタイ8-9章は、その分岐点となるイエスの救いのみわざを凝縮して描いた核心の段落と言えるでしょう。